神戸市外国語大学 学術情報リポジトリ

バスク伝統スポーツ文化とグローバリゼーション

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2013-07-01 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 竹谷, 和之, Taketani, Kazuyuki メールアドレス: 所属:
URL	https://kobe-cufs.repo.nii.ac.jp/records/1775

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.

バスク伝統スポーツ文化とグローバリゼーション

竹谷　和之

はじめに

バスクで初めて伝統スポーツを見たのは一九八五年三月、ベルガラというギプスコア県内陸の村である。ペロタ・マノ（素手）のプロの試合であった。この球戯は直径六センチほどの硬球（野球の硬球よりも二周り小さい）を壁に打ち返して得点を競うものである。相手にではなく直接壁に返球する。交互にボールを打ちながら、相手が返球できないようにゲームが組み立てられる。

最初の驚きは、まず聴覚からであった。フロントンというコートに今まで聞いたことのない音が響いていた。ボールが石の壁に当たる音とはことなる、「生」の音、硬球を素手で打つ音である。試合が始まれば、それまで以上の強度のある音が届く。私の身体の内部で何やらうごめき始めた。じっとしていられないほど、ペロタをする身体が音によって伝わってきた。そして気がつけば選手と同じ動作で一緒に身体を動かしていたのである。座席で身体を動かすわけにもいかず、後方へ行き立って観戦した。このとき感じたバスク伝統スポーツの身体性は、本来の意味での自己責任であり、自己完結といえるものであろう。試合終了までの約二時間、その音が内在化し、何とも奇妙な感覚が私を支配していたことを記憶している。もちろん現在でもその音を聞けば、あの感覚が蘇えり、そしていまだにその肉の音に慣れることはない。

さらに、もう一つ。コレドールとい一〇人前後の賭の仲介人の声である。観客同士の賭を請け負い、手数料として一〇数パーセントのマージンをもらい受ける。何回も繰り返されるその声は、試合をしている真ん前でプレイヤーやコートに背を向けて行われる。試合に関心はあっても、見ることはない。フロントン中にこだまするその声は、観客を試合に集中させる誘因となっていたと思われる。

その後、大会が開かれている村を訪れて丸太切り、石かつぎ、石引き、草刈りなどバスク特有のスポーツを目の当たりにすることになった。選手たちはあくまでもストイックで、少し恥ずかしそうに競技に挑む姿は見ていて好感が持てた。

そして今日までバスク伝統スポーツとの接触が続いている。ルールなどの大きな変更はそれほどなされておらず、シンプルなままである。しかし目には見えないが当初の状況と比較してかなり変容していると思われることがある。それはバスクという地域が重工業から商業・観光産業へと「発展」していくにしたがい、民衆の意識あるいは伝統へのまなざしや、競技者自身の伝統スポーツそのものへのスタンスの取り方が変容しているのではないかという実感である。新聞のスポーツ欄やテレビの取り扱いを見ていても、以前とはさして変化はないように思われる。しかし企業名のロゴが入ったTシャツを着たり、選手のすぐそばにバスクで知名度の高い銀行の看板が一番良い場所を陣取っている。この外形的変化が常態化し、伝統スポーツを取り巻く状況に直接影響を与え、「スポーツする身体」へも当然浸透していると思われる。それが伝統スポーツへの「違和感」として感じられたのである。彼らにしか意味を持たなかった伝統スポーツ文化が近代的ルール化を経て、誰もが参加できるみんなのスポーツ文化へと「発展」しているように見えたからであった。ほとんどの伝統スポーツ選手は日常労働では使用しない技術を身体に刻み込み、競技の準備をしている。かつては労働で鍛え上げた身体を披露する場であった競技会は、今では近代的トレーニングを経てその技術を提示する場に変化した。巨体をルールに合わせて窮屈そうに試合をしている様子には、日常労働を継承していないというある種の恥じらいが表出しているのではないかとも思われる。またバスク人しか理解できなかった競技ルールが、分かりやすくマイクで観客に説明がなされ、スペクタクル化を前面に押し出してもいる。一つにはこれらの競技に接する機会が減少し、バスク人にとっても「異文化」として把握されていることや、メディアの発達により他の近代スポーツの情報が手に入れやすくなり、これらの伝統スポーツが少数派として取り扱われていることもあるであろう。

しかし、なぜこの「違和感」を感じるのか。単なるノスタルジーに浸り古き良き時代を回顧するのではなく、この疑問が伝統スポーツ文化変容を

成立させている力学へ向かうのはそう時間はかからなかった。地域特有の文化がその地域色を取り払われ、その先には強烈に進行する均質化によって存立を問われているのである。このグローバリゼーションは名目上の自由競争の時代であり、いかに民衆に支持されるかという選択肢の一つにもなっているのである。そして日常労働で鍛え上げた身体を披露する伝統スポーツではなく、特別なトレーニングを経て伝統スポーツ用の身体を作りあげられているのである。つまりグローバル化が与えた影響は目に見えないバスク文化の意識や構造にも及んでいるということである。この小論ではバスク伝統スポーツの変容過程とグローバリゼーションについて考察を進める。

本論で扱うバスク伝統スポーツは、以下のような連盟に所属している。

ペロタ・バスカ連盟（ボールゲーム）
バスクスポーツ連盟（丸太切り、石かつぎ、石引き、など）
漕艇連盟（レガッタ）
ボウルス連盟（ボロス・アラベス、など）

1．あるテレビ生中継での出来事

一九九六年七月のある日曜日、テレビ生中継でプロ選手によるペロタ・マノ（素手）のシングルスの試合を見ていたときであった。開始時間が来てもいっこうに始まる気配がなく、そうこうしているうちに一時間半が経過した。当時は、日本のようにコマーシャルを挟んだりして時間稼ぎをすることはせず、その経過が逐一報告されていた。要約すればこうだ。数社と契約し、資金援助をしてもらっているプロ選手が最初に着用するウェアでもめていたのである。一つのウェアに一社の広告が施してあり、新しいウェアを着て出てくると、すぐに引き返して別のウェアを着て登場するということを繰り返していた。最初に着用する企業のTシャツをめぐって、それぞれのパトロンからクレームがつき、プレイヤーはわけもなく同じことを繰り返していたのである。マノの選手といえば、バスクでは一番人気があり憧れでもある。硬球を素手で打ち返す手を持っているだけで注目を集める、このバスクの代表的伝統スポーツ選手の姿を見て、経済支援という支配がこの球戯にも浸透していることに気がついた。試合はその後始められたが興ざめを拭いさることはできず、また選手も本来の力を発揮出来るわけもなく、何とも後味の悪い試合であった。

現在ではペロタ選手の独自の判断に任せるのではなく、Acegarce と Aspe という企業がプロのペロタ選手を抱え込み、選手権などの試合へ派遣している。名だたる名選手が２つの企業傘下に属し、地位の安定化と収入が保証されている。

2．はじまりとしての賭

アギーレ・フランコによれば、バスクにおける二名の競技は、隣人同士の仲違いや諍いがもとであり、それを広場で決着するための方法であったという。単なる力試しというきれいごとでは済まない日常の鬱積が、ときには競争や競技に変化し、双方が納得できる装置として機能していたといえる。その時の審判は近隣住民であり、また同時に競技結果や競技進行中に金を賭けて楽しんだのである。賭ではもめごとを避けるために「第三者」としての審判をたてて、掛け金の管理がなされた。競技者、見物人そして審判である。競技者もまず第一に名誉を賭け、次に賭物を提示し、意志表示をする。

ガブリエル・アレスティは家の名誉を守り抜く決意を次のようにあらわしている：

守り抜く　父の家を。
オオカミや、日照り、
高利貸しや、裁きに対しても、
父の家を　守り通す。

家畜や、農園、
松林がなくなるかもしれない、
財産や、収入、配当もなくなるかもしれない、

でも　父の家を守り抜く。
軍隊が強奪しようものなら、
この手で父の家を守り抜く。
腕がなくても、
肩、そして胸がなくとも、
魂で父の家を守る。
私が死に、魂が失せ、
子を亡くしても、
父の家はそこにある。

家の存続を願うバスク人の強烈な意志が伝わってくる。そしてこの家の名誉を賭けた競技は凄まじいまでの様相を呈するであろうことは想像に難くない。日々の労働としての有用性が放棄され、新たに賭として息を吹き返して村人のまえに現れる。この密度の濃い事物（＝ショーズ）には、バタイユのいう「贈与」と「消尽」の変容が見て取れる。栄誉を賭けるとは、身体エネルギーの限りを尽くし目前の競技に集中することである。その姿はまさに「消尽」である。そして勝者はその「消尽」の果てに、「贈与」として栄誉と賞品などを受け取る。もちろん、敗者も「消尽」の限りを尽くし、負けたとはいえ、満足感を持ちうると思われる。

そして、バタイユはこうもいう、

・・・獲得は、手に入れたものを失うことを「目的」としている。喪失について、功利主義的な説明をするのは、余計なことだろう。喪失が生という意味をもっていること、閉じた富裕化のシステムが不毛なものとなったときには、喪失が豊穣なものとなることが多いのはたしかだ。
・・・人間の生は、星辰の輝きのようなものとして生きられる。根底においては人間の生は、この光輝のほかに目的をもたない。その栄誉にこそ、究極の意味がいるのだ。「贈与」「消尽」「喪失」などの言葉はここでは輝きをもって迎え入れられる。

農家を建てるときには、その家に名前を付けるという。家の名は正面玄関の上部に、あるいは壁に取り付けられている。たとえば、Mendialdea（山の方）、Oihanbidea（森の道）、Aroztegia（鍛冶屋）、Dendariarena（裁縫師）、Perurena（ペドロの家）、Atano（小さい家）、Etxeberria（新しい家）など家に対する思いは深くかつ強い。財産分けはせず、一人に全財産を継承させるために、家を出て行かざるを得ない兄弟は多いと聞く。

現在は、石でできた農家は三階建ての最上階に干し草、二階に人、一階に家畜（羊、豚、鶏など）とカセリオ内で過ごせるように工夫されている。また、カセリオの回りにある農地では他の食料も自給でき、いわゆる独立経済が営まれるようになっていた。西谷によれば、経済の領野は「ゾーエー（ただ生きている状態）」と「ビオス（ポリス的生活）」にわけられるが、前者である「ゾーエー」はただ毎日を過ごすための単純な生の場である。ギリシア人にとってはそれが「オイコス」であり、さらに「エコノミー」という言葉ができたという。バスク山中での生活はまさに「ゾーエー」であり、ある共同性でかたち作る「ビオス」の生とはことなる。バスクでは賭は生の延長として、必要なスポーツ以上としてその内部に組み込まれているのである。

その典型をフリオ・メデム監督は『雌牛 Bacas』（一九九一）という映画で表現した。山バスクに住む三世代の生き様を、牛の目を通して冷静に追う。その映画は単調なカセリオの生活を祝祭にする斧の賭試合から始まる。自然の影響を直接受ける山中で、労働に勤しみながら日々の生活を営々と送るバスク農家や人々を映像化し、バスク人の内奥に存する精神性は変化することはないという普遍を描こうとした。日常の労働作業能力が競技に変化したとき、ここでは競技者の性格や勤勉さなどは消失し、目前の競技能力にのみ注目が集まる。結果がすべてを決定する厳格な競技である。二つの戦争（カルリスタ戦争とスペイン市民戦争）の間に生じたこの山間部の出来事は、長いバスク史のほんの一コマでしかない。このシンボライズされた映像には、バスク伝統スポーツ＝賭が凝縮されている。

このカセリオの人々の声を、アレステイはまた次のように詠む：

賭は金儲けなもんか、
アシュラール爺さんは言った。

金持ちによう話したわい、
われら貧乏人には銭などない、
賭はわれらの最後の希望なんじゃ、と。
村の長はそう言った。

娯楽が発達していない時代では、経済的リスクをスリリングに楽しむことができる唯一のものとして賭があげられる。競技者は自らの力量をいかに発揮するかという実感があるが、見物人は競技者にゆだねて見守るしかない。もっと言ってしまえば、それこそカミ＝正義に委ねるしかないのである。全てのコントロールから外れて、あとは祈るのみとはこのことであり、賭の醍醐味でもある。アレスティは賭の本質を見抜いており、それこそバスクでの賭（＝スポーツ）は、労働から変化して重要な役割を果たしていることになる。

カイヨワは、遊びの要素としてアレア（偶然）を指摘し、そこに含まれる賭を次のように表現している、

アレアは運命の恩恵を現わし、明らかにする。遊戯者はそこでは完全に受動的だ。その素質や性向、技倆や筋力や知力といった手段を発揮するのではない。ただ、希望と戦慄のうちに、運命の判決を待つのみである。彼は何かを、賭けるのだ。天の裁き〔正義〕は彼の冒したリスクに厳密に比例した報いを与える。― この場合もやはり、方法こそ異なれ、正義が求められているのであって、正義は理想的条件の下で力を揮おうとしているのだ。

カイヨワのいう「正義」がまさにバスクの賭であり、一切を放棄して託すのである。

3．共同体

一つのカセリオを中心とした生活が、他のカセリオと共同せねばならない事態が生じたときには力を合わせる。それが谷ごとのバスク語方言にあらわれている。日常で必要な言葉は限定されており、その使用については自ずとまとまりができてくる。現在でも、谷を越えると全く理解不能なバスク語が話されている。それが最終的には谷の住人ではないよそ者を発見する判別機能をはたすことになるのである。その集合体の中での競技は家の名誉を賭けて競われるが、この競技は谷を越えて広がる可能性を含みもっている。

現在は守護聖人祭にみられるイベントの中心はバスク伝統スポーツであり、その村の代表が登場する。近代スポーツがイベントに登場するのはほとんどないと言ってよい。強いて言えば自転車競走（ロードレース）くらいであろう。伝統スポーツ競技者が村に不在の場合は他の村から招待される。この交流を通して、地域代表という肩書きとともに有名な競技者が排出していくのである。ナバラ県の寒村で生まれたペロタチャンピオン、レテギ2世や、レイツァ村の力持ちイニャキ・ペルレナの名を知らない人はいない。こうしてバスク全土へとその名は知れわたるのである。

個別競技から総合競技へという流れは、日常労働でこなせる仕事量は多岐にわたるため、バランスのとれた身体が要求される。司馬遼太郎によれば、「草を早く刈り、速く走り、そして力持ち」がバスクでは尊敬されるという。また、「バスク人は本来木こりであり、農民であり、羊を追う人であるために、男は体力が最大の価値とされた。（中略）よき木こりや炭焼きであるためには、若い頃の木割り競争で鍛えておかねばならないのである。よき戦士であることとつながりのあるギリシア以来のスポーツや、よき貴族であるために運動神経や統率力、状況判断力をやしなうイギリスのスポーツとは、どうやら根のほうでちがっている」とバスクスポーツを評する。強いて言えば、伝統スポーツと近代スポーツの差異を明確に指摘している。この司馬のスポーツ区分も西谷がいうところの「ゾーエー」と「ビオス」で語れる事例が提供され、もちろんバスクは前者に属し、ポリス的生活とは距離をおく。

共同体とは、「地縁・血縁あるいは感情的なつながりを基盤とする人間の共同生活様式」とされ、特定の目的を達成するために結成される組織と区分される。これにしたがえば、バスク伝統スポーツは共同生活様式に組み込まれており、そこから飛び出して独自に行われることは想定されていない。つまり共同体の中だけで完結するのである。伝統スポーツの典型であろう。

一九九二年夏、バスタン谷アライオス村の守護聖人祭での丸太切りは、出身地はことなるが顔見知り四人の対戦であった。二人ずつペアになり、交代で丸太を切る。参加選手は今まで培ってきた技量を村人の前で披露し、評価される。応援する声には仲間の背を押す温かみが感じられた。その場にはもちろん選手には見向きもせず、観客間の賭を取り持つコレドール（仲介人）の姿があった。振り下ろす斧の音は谷間にこだまし、また見物に訪れた老若男女の身体にまで達していた。

一方、フランスバスクの小さな港町シブールはフランス南西部に位置し、夏季には観光客で人口の一〇倍にまでふくれあがる。バケーションを海岸部で過ごし、賑わいの中に身を浸し、また近隣で計画されたイベントに出かけていく。したがって夏季にはアパートやマンションなどの宿泊施設の空室は見つけられない。一九九八年八月その小さな村の広場で、ペロタ・バスカの一種目ラシュアが行われた。対面式のボールゲームはバスクでも競技人口が少なく、フランスバスクの競技者にも普及させようという試みの一つである。そして村の夏季プログラムの中に入っており、観衆は観光客であり、初心者相手に歴史やルールの説明からはじまった。もの珍しさに最初は興味津々で聞き入っていた人々が、試合がはじまるとこの球戯に慣れないせいもあって、ざわつきはじめた。ルールが複雑すぎて、内容がよく理解できないらしい。毎回のスーパープレイには拍手がおこるが、全体の進行を見据えた理解にまでは至っていなかった。プレイヤーと関係者のみが完全に把握していただけであった。このラシュアは得点へと結びつく過程に少々時間がかかる。近年ではバスク人でさえこのルールを理解できない人々が多いと聞くが、これこそ共同体内で時間をかけて楽しんだ名残であろう。

この事例は、観光人類学では伝統スポーツの変容過程として理解されており、同質的な共同性をもたない人々への見世物として新たな価値をみいだされたという。そうなれば今後、観客のより分かりやすいルールへと変更される可能性も出てくる。この変容に内在する問題は、共同体的価値（バスクで培われた）が消失し、新たな価値が見いだされていくことになろう。

4．バスク遊戯・スポーツ連盟設立

一九七九年六月サン・セバスティアン市において、バスク各地域（スペイン四県、フランス三地域）の代表が集合し、バスク遊戯・スポーツ連盟が設立された。会長はアギーレ・フランコ氏であり、ベンゴア氏（アラバ県）、エリセギ氏（ギプスコア県）、アレチャ氏（ビスカヤ県）、エラソ氏（ナバラ県）、ホセバ・アギーレ氏とアモンダライン氏（フランスバスク地方）で構成され、統一ルールの整備を中心議題とし、加えて相互交流も含まれていた。

連盟設立の主旨は賭の問題が顕著になったからである。賭を排除するのではなく、賭の運営に全員が納得のいくルールを設けること、それがこの連盟設立の目的の一つである。賭けに参加する人々は、実年以上の男性で占められており、事故や揉め事が生じた場合の対策が必要なほど人気があったということである。残されている写真を見る限りにおいて、現在ではみられない見物人の熱狂があり、その熱い視線の先には丸太切りや石かつぎなどの賭試合が行われていた。最終的に一九条の規程に基づいて実施されることになった。条文には、賭についての詳細が示され、試合から生じた損害などに関しては、各連盟は責任を負うことはなく、開催当事者間で解決するように決められている。

一九七九年はスペインバスクにとって記念すべき年として認知されている。一九七五年のフランコ死亡により、名実共にバスク自治州が一九七九年に認められ、それはまたバスク文化の解禁を意味した。一九七六年に一足早くナバラ県が一県で自治州となり、スペインにおけるバスク文化圏はすべて自治権を獲得したことになる。一九三九年から続いていたバスク語使用禁止令などの弾圧から解放されたのである。その解放を待ちわびていた各専門領域の人々は、四〇年足らず前の状態への復活に力を注ぎ、当然バスクスポーツも例外ではなかったのである。

一方フランスバスクでは、スペインのようにバスク文化禁止令を敷かずゆるやかな統治あるいは同化政策がなされ、フランス語を公用語とされた。この政策が功を奏し、フランスに自治を認めさせるような動きには発展しなかった。内陸では農業、海岸部では観光業が主要産業となり、約三万人といわれるフランスバスクの人々の生活を限定的にしたのである。

現在のスペインバスク伝統スポーツ連盟はビルバオに本部があり、県支部は本部と連絡を取りながら運営されている。県に所属する選手たちを登録させＩＤカードを作成して管理し、年会費を徴収し、大会への派遣手続を行う。希望すれば誰でも参加出来るわけではなく、あくまでも近代的手続を経て行われる。

バスクの各県や地域代表が集う大会として、「七地域対抗バスク伝統スポーツ大会」が毎年開催場所を変更して行われる。筆者が見たのは、二〇〇六年八月一三日フランスバスクのバイゴリという村の第一八回大会である。バスクは一つという確認のため伝統スポーツを通して、またバスク語を主要言語として実施された。競技開始は午後四時であり、約四時間かけて一〇種目を競い合った。競技人口が少ないフランスバスクからは全ての種目にエントリーすることはなく、等身大の参加であった。フランスではスペインのように連盟が設立されているわけではなく、あくまでも個人参加である。

伝統的な競技形式も残ってはいるが、午後のみで終了させるためには、従来のルール（二者間の競技）を変更して多数がいっせいに競い勝者を決定する方法もとられている。丸太切りはその典型で、各地域代表七人が登場した。また、一度に競技できない種目（石かつぎ、イングーデという金敷上げ競技）などは、担ぎ上げた回数で順位をつけていく方法もとられた。

会場は市民広場を使用し、関係者以外は有料であり、入場料は八ユーロ（当時一二〇〇円）必要であった。各地域の応援団や観光客が入り混じり約三〇〇〇人がこの競技会を楽しんだ。このことからも判明するように、すでに観光化が進行しており大会の重要な資金源になっている。ただ、賭の仲介をするコレドールの姿はなかった。個人的な売買よりも、入場料収入を優先させている。いわゆるアマチュアの競技会には賭はふさわしくないという発想である。

大会の前後には、ベルチョラリという即興詩人が、大会に参加する選手や勝者を称える歌をバスク語で歌った。これは文字を残さず、人々の記憶に刻みつける重要な意味があり、フレーズを聴くだけで蘇ることもあるという。

大会終了後には全員が体育館に集まり、食事会（comida popular）があり、互いの健闘をたたえ合った。

この大会からもわかるように、競技形式はある程度近代化されたとしても、競技自体が近代化されてはいない。あくまでも労働起源の形態がしっかりと残存しており、普遍化にはまだいくつかの改変が必要であろう。しかし、強いていうならば、これらの労働を継承している人たちがどれだけいるかといえば、かなり少数、あるいは一人もいないということになりかねない。このことは伝統スポーツの成立基盤が消滅し、純粋なスポーツして受け入れられているというのが実情である。

5．学校教育のプログラムとして

バスク伝統スポーツ文化がこの三〇年あまりの間にかなり変容し、近代システムへのシフトチェンジがなされている。いわゆる純粋スポーツとしての地位を築くため、土着性や地域性を排除し、またタブー視される賭などを明確に位置づけて、距離を置こうとされているのである。こうした試みは他の近代スポーツとともに、伝統スポーツ文化を普及させるべく、政策としてバスク政府や県スポーツ課などの財政支援を得ている。スポーツ振興策における競技の一つと考えられている。その取り組みを学校教育と社会教育でみてみよう。

5－1．学校ペロタ Ikaspilota

民族学校と呼ばれるイカシトラ Ikastola で始められたペロタ教育＝体育のことをいう。この一〇年あまりの間に整えられたが、その普及は公立・私立学校でも導入されはじめている。創始者のホシュアン・ウンサインは、元ペロタ・マノのチャンピオンであり、約二〇年前から仲間とともに学校ペロタを考案していたという。近代的トレーニングにペロタの遊技性を加味し、低学年から高学年まで身体の成長に合わせたプログラムが組まれている。ウンサインのグループは教材作成、時間割、指導者派遣などの基本的枠組みを作成しただけでなく、行政に積極的に働きかけ、学校教育への導入に取り組んだ。その結果、スペインバスクやフランスバスクにまたがり、民族学校でペロタの導入が理解され、現在はその数が増加している。

学校への導入はよい人材を見つけ出すことにも繋がるが、それよりも近

代スポーツと距離があったペロタをいかにその社会的地位を上げていくかを模索したものであった。そのためには教材として優秀性を示す必要があったのである。

ペロタは今までにオリンピック・エキシビションで三回も登場し、正式種目へのアピールをしてきた。しかし未だその実現をみていない。ペロタ世界選手権も実施されている国際組織をもつペロタ・バスカは、一九二一年にフランスペロタ・バスカ連盟、一九二五年にスペインペロタ・バスカ連盟、そして一九二九年に国際ペロタ・バスカ連盟が発足した。植民地主義によって世界的に普及している好例であろう。

したがって、ペロタの形態に関してはこれ以上の改変が困難なほど完成形をしている。ただし世界選手権が開催できる種目は限定され、その中でもっとも古形態といわれるマノ（素手）は、ボールを手で打つ痛みを我慢しながら試合が行わねばならないため、価値の共有されていない地域への伝播はみられないと思われる。また、ボールは手作りで手間暇がかかるため、一度は工場生産されたが不良品が多く、現在はかつての方法で一つひとつ手で作られる。

またフロントンという球戯場は、バスクの村ではマルチ使用が可能であり、祭の場合は民族舞踊で使用し、テーブルを並べて食事会も行われる。日頃は子供たちの遊び場や高齢者の憩いの場にもなる。このフロントン使用をめぐって多種の意見があるだろう。一方、日本では競技場使用はかなり厳格に規定され、自由な使用は極力排除される。

5－2．漕艇クラブのプログラム

ギプスコア県北東に位置するオンダリビア Hondarribia という港町では、民間の漕艇クラブが中心になって、バスク伝統のレガッタを含めた漕艇授業を市内の小中学校の正規授業に組み入れている。レガッタ競技大会でも名を知られている強豪でもある当該クラブは、器具の使用法やオールの漕ぎ方、海の知識などを織り交ぜながら、体育授業の一部を受け持つ。このようにして漕艇への導入をクラブ自らが働きかけ、興味を増加させ、クラブの競技大会へ誘い、その中から将来のクルーを見つけ出すのである。

トレーニングは人数にもよるが大きく二手に分かれ、一つは室内プールで実際にオールで漕ぐ班、もう一方はマシーントレーニングを行う。それを交互におこなう。基本的トレーニングが終了すれば、六月に五人乗りのバテルスという最少人数の競漕が計画される。

この事例は地域の漕艇クラブの独自のプログラムであり、ペロタのように地域を横断したものではない。

5－3．バスク大学体育学部プログラム

体育教員養成課程の必修科目として、「バスク遊戯・スポーツ」授業が組み込まれている。二名の教員がこの授業を担当し、同じ授業をバスク語とスペイン語で二回行われ、学生はどちらか一つを選択受講しなければならない。この授業はスポーツ入門として位置づけられており、バイオメカニクス、運動システム、解剖学などの授業とも関連づけられている。また基礎知識として技術戦略、教授法が含まれる。

講義の内容は起源、村の特徴、文化（言語、伝統、農漁村の生活組織、工業化、都市化、バスクスポーツの衰退）、バスク伝統スポーツの特徴、賭、連盟の創出などである。取り扱われる伝統スポーツは一四種目あり、各種目の特徴を分析したり、教科単元を作成したりする。

実技は体育館を利用し、安全確保を最優先しながら出来る限り多くの種目を体験するように工夫されている。また非常勤講師として各種目の専門家を呼び、屋外で実技をする場合もある。

もちろんペロタ・バスカと漕艇もあり、通常授業と集中授業とを織り交ぜながら進められる。しかしボウルスに関しては授業で取り扱うことはない。これはボウルス協会が独自のプログラムとして、義務教育の中で展開する計画を立てている。

6．社会教育のプログラムとして

伝統の保存はバスクにおいても重要な課題として浮上している。フランコ独裁四〇年足らずの間のバスク文化への弾圧や、フランコ死後の急速な近代化により共同体の崩壊によって、バスク文化の無理解や担い手の減少が喫緊の対策を必要としている。バスク語を必要としない人々も増加し、

バスク語に基礎を置いた文化政策が必要にもなっている。そして近代スポーツに価値を置く若者はバスク伝統スポーツへは参加するが、最重要とは認識しておらず、後継者となる可能性は期待できない。それを憂えた自治体や活動家などは教育だけでなく、社会教育においても積極的に導入をはかるべきとして、献身的な活動を地域で展開している。

6–1．ビスカヤ県バスク遊戯・スポーツ連盟

連盟会長の聞き取りによれば、選手は全てアマチュアであり、一九五六年から改正を繰り返したルールブックと記憶で運営しているという。綱引以外は柔軟な対応ができ、多少ルール変更しても問題ないが、綱引は国際ルールと連動しているので、バスクでは問題があるという。かつては対戦相手同士で試合が決められ、相当額の掛け金があった。現在は連盟が対戦相手を決定する。

種目の中で闘羊に関しては動物愛護団体からの抗議を受けているが、連盟は放置しているという。この決定は後発の価値の押しつけに対して、闘羊を楽しみにしている多数の人々への配慮があり、毎日曜日アスペイティアで賭試合が行われる。牛の石引きに対しても規範的要求をすることなく、当事者間の取り扱いに委ねられている。牛の能力を発揮させるためには、棒の先に取り付けられた釘状のもので刺しながら、試合が行われるからである。

ビスカヤではバスク伝統スポーツ指導者の資格は必要なく、選手自らが指導を行う。五〇〇人の登録があり、一人一年に必要な経費は二五ユーロであり、毎年更新する。それだけでは運営資金に限界があるため、バスク政府、ビスカヤ県、市町村、百貨店、銀行などからの助成がある。これらの助成は自治体や企業の地域貢献の意味もあるが、それよりもバスク文化に対するアイデンティティがその根にあることが感ぜられた。

6–2．ナバラ県サカナ地方の伝統スポーツ政策

ナバラ政府の支援を受け、ナバラ県バスク遊戯・スポーツ連盟が助成を行う。ナバラ県の首都パンプローナから西へ一〇〇キロメートルあたりにサカナ地方があり、伝統スポーツの学校スポーツへの導入に加えて、綱引、丸太切り、石かつぎの社会プログラムが注目される。とくに丸太切りは、世界チャンピオン、フローレン・ナサバル（当時三六才）などが指導にあたり、小学生から当該スポーツに接近する方法を模索している。サカナ地方を中心して近隣にも声をかけ、バスク伝統スポーツ大会を開催して、将来の担い手たちを刺激する。

石かつぎ学校はイルルツンという内陸の中核都市にある。現在は四名の会員であるが、子供の参加はない。したがって仕事を終えた成人が練習に来る。一〇〇キロ前後の石をかつぎ上げるには、まず身体をつくる必要がある。体操競技のように補助練習はせず、比較的軽い石を何回も上げて鍛え上げていく。

6–3．私営クラブによる伝統スポーツ振興（フランスバスク）

ニャプラック（Napurrak）という名の私営クラブは一九七四年八月にエスペレッテで結成され、おもに陸上競技が中心に始められた。翌月にバスクスポーツ部門ができ、フランス語でフォルス・バスク force basque、バスク語でインダール・ホコア Indar Jokoa と呼ばれた。会長はバスク人で元銀行員であり、定年退職後趣味であったマラソン中心のクラブを立ち上げた。クラブ運営のためにビジネスとしての可能性を模索して、フランスバスクの三つの地域でバスク伝統スポーツ大会を開催した。とくに綱引は筋肉強化や効率的な動き獲得のために科学的トレーニングなどを取り入れた。また四年ごとの世界綱引選手権大会に照準を合わせて、クラブのスケジュールを計画している。

クラブ主催のクロスカントリーは評判が良く、軍隊からの参加も見られるという。バスクでは競走というスタートとゴールだけを指定した競技があったが、クロスカントリーもその延長上にある。

フランスバスクではバスク伝統スポーツを統括する組織がなく、個人の振興策に頼っている。万一、バスク伝統スポーツへの興味関心がさめてしまえば、フランスバスクでは伝統スポーツは消滅する可能性は極めて高いであろう。そのためにも、近代化は避けられないと会長はいう。また伝統スポーツ一種目単独で実施するのではなく、観客が退屈しないためにも他

の種目と同時開催も視野に入れるべきで、そして外国からの参入も当然受け入れる必要があるともいう。

異文化の人々を受け入れるためのこれらの意見は、まさにグローバリゼーションへと突き進んでおり、バスク伝統スポーツへのアイデンティティではなく、一つの商品と化してしまっている。

7．グローバリゼーションと伝統スポーツ

伝統スポーツが徐々に地域的意味を消失し、グローバルスポーツへと変容していく時に見せる透明性は、文化の異なる人々の受容を手助けする。愛好者が増加し、ルールを簡素化し、安価な用具が手に入り、競技場の確保などが整えば、条件は揃ったように思える。しかし面白さや楽しさを理解し共有するまでは、試行錯誤が続くであろう。バスク伝統スポーツが、近代スポーツの仲間入りを果たしたとしても、残存するかどうかはまだ先のことだ。ようやく近代スポーツとして制度的に認められ、それもバスク州とナバラ州内に限定される。また他州においても多少の普及はあっても競技人口を増加させるためには、単なる健康志向ではなく、子供たちや一般市民の憧憬となる英雄の出現を待たねばならない。そして学校体育において、また社会の中で労働起源のスポーツが延命していくには、バスクという地理的範疇からはみ出て、他の異文化社会にまで受け入れられる完成度が求められる。もし普及の阻害要因があるとすれば、それは土着性（バナキュラー）の残存であろう。近代化の仲間入りを目指してはいるが、スポーツを成立せしめている内実が、まだ地域性を保持しているのである。

たとえば、丸太切り。丸太はいつも切り出しを使用する。適切な木の用意は、競技者が増加すれば行き詰まるであろう。石かつぎの石は個人所有であり、高額なため手に入れることが困難であり、さらに練習場所の確保も課題として浮上してくる。

ペロタ・マノの場合も同様である。まず素手で競技することがバスクでは有意味であるが、ラケット使用を常態としている所では受け入れられないであろう。用具の開発は、手への負担をいかに軽減するかを考慮されるからである。手への痛打が共有されない限りは、既存の文化性を放棄し、新たな文化を受容することにはつながらない。そしてこれらの伝統スポーツをする広場の意味、歴史的記憶の共有、などはパルタージュ〈分割ー分有〉の重要な要素なのである。普段の遊び場が球戯場として使用されるとき、その場は祝祭的時空間へと変化し、そのスペクタクルに村人の期待が渦巻く。それに加えて、ベルソラリという即興詩人の詠う名試合やこれから試合をしようとする選手個人の歴史が、フロントンや谷間にこだまする様を思い浮かべてみてほしい。過去と現実が交錯し、そして観衆の記憶に長く留まることで、目前の試合が後の世まで語り継がれるのである。

バスク特有のスポーツが自立するための国際社会への統合の困難は、西谷の言葉を借りれば、「後進性」や「欠如」を示すものではなく、むしろ西洋的な世界秩序への「抵抗」の証である。バスクは地理的には西洋に属しているが、その文化的「後進性」が指摘されて、いち早く進路変更をしたはずであった。しかし一向に伝統スポーツの競技者が増加せず減少傾向にあるのは、当該スポーツに内在する「文化特性」あるいは「バスクなるもの」が抜けきれていないからである。グローバル化はその「バナキュラー性」をいかに排除し、無色透明にするかが課題である。バスクでもスポーツの志向性は近代スポーツにとって変わられているが、伝統スポーツを担う人々の相互扶助の習慣は西洋的な生産効率やマネージメントの発想とはまったく違う、いはば「人類学的」構成で成立している。そういうものがグローバル化の圧力に対する「抵抗」として随所に露呈しているが、「普遍的」基準に照らし合わせるならば、ネガティブにしか考えないであろう。それはグローバル化で問われることのない公準としての「近代性」が現前しているからであり、スタンダードとして貫かれている。

西洋が作り出した世界性には還元されない「伝統スポーツ」の異質性に対し、伝統社会は妥協せざるを得ない道を探るようになったが、近代は「野蛮」から「解放」することを諦めない。この主張が古来の「伝統スポーツ」領域に「グローバリゼーション」というブルドーザーをかけ、地ならしをしようとしているのである。

世界にみられる伝統スポーツは多様に変化しているが、バスク伝統スポーツは世界で「近代化」が最も進行している事例として考えることができる。その意味では今後の展開が注目され、変容過程に潜む「理性」を検討し続けていきたいと思う。

参考文献

Aguirre Franco,R., Deporte rural vasco, Txertoa, 1983
Aguirre Franco,R., Gurre Herria, Kriselu, 1983
Aresti,G., Harri eta Herri, L.Haranburu, 1979
Equipo de Nosotros los Vascos, Nostoros los Vascos, Editorial Lur, 1990
稲垣正浩・今福龍太・西谷修　『近代スポーツのミッションは終わったか　―身体・メディア・世界』　平凡社　二〇〇九年
伊豫谷登士翁　『グローバリゼーションとは何か』平凡社　二〇〇二年
J＝L・ナンシー著　西谷修・安原伸一郎訳　『無為の共同体　哲学を問い直す分有の思考』　以文社　二〇〇一年
西谷修　『理性の探究』　岩波書店　二〇〇九年
竹谷和之　『バスク民族のスポーツ文化政策に関する総合的調査研究』平成一六年度～一九年度文部科学省科学研究費補助金・基盤研究Ｂ研究成果報告書、課題番号一六三〇〇二一一、二〇〇八年
テッサ・モーリス＝スズキ・吉見俊哉編　『グローバリゼーションの文化政治』平凡社　二〇〇四年
船井廣則・松本芳明・三井悦子・竹谷和之　『スポーツ学の冒険』　黎明書房　二〇〇九年